

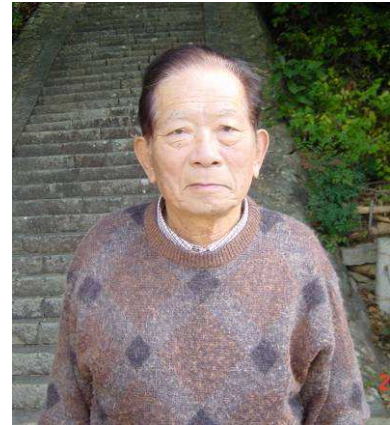
昭和の南海地震体験談

氏名:津村 忠男(つむら ただお)

生年月日:昭和5年6月10日

地震を体験した場所:御坊市

当時の家族状況:祖母、父、母、第二人、妹二人、叔父



1) 地震発生時の状況

当時16歳。家で寝ていて父に起こされた。表に出ると近所の人も出ていた。空を見たら真っ赤で印象的だった。「津波来るぞ！」という声が、浜から聞こえた。

安政の津波で、鰹島まで潮が引き、200軒あった家のうち140軒が流出した記録があるので、その声を信じて、飼っていた牛を連れて、自分のミカン畑のある山まで避難した。近所の人も同じ山に避難した。



<写真は避難した中山>

2) 津波襲来時の状況

当時、地震＝津波連想は、皆、あった。学校の教科書に「稲村の火」が取り入れられていたし先祖からの言い伝えがあった。

自分が何を持ったのかは記憶に無いが、一緒に住んでいた叔父さんが、米一俵掲げて持って行ってきていて、それを山で、夜が明けて知った時、本当に感謝した。

暗闇の中“ザーザー”と鳴る水の音は聞こえたが、暗くて見えなかった。

3) 家族の行動・被害

家族全員、山に避難して無事。

4) 集落・周囲の被害

父に言われて、父、叔父、私の3人で、夜が明けてから、家を見に行った。家は床下浸水。一筋、海側の家は、床上浸水で、首まで水が漬いたらしい。

逃げ遅れた人が避難後、語る話を聞いたら、「慌てて転んで口に水が入ったら、生半可な辛さではなかった」と言っていた。肥溜めが溢れて難儀したことは忘れられない。

5) 地震・津波後の生活

片付けや掃除は皆、それぞれ自分でした。

肥溜めが溢れたので、本当に困った。

当時、父の仕事していた、米屋の米も、無事。



<現存する玄関の水が来たしるし>

6) 次の災害への備え

特別何もしていないが、この土地は、必ず大地震の後、20分もしたら津波が来るから、神戸の震災のように、避難できずに家に閉じ込められても、助かる例は、“紀南では無い”だろう。

箆箆や重い家具を器具で止めたり、転倒・落下防止の工夫は必要だろう。圧死だけは防いで、とりあえず高い所に避難する。

自主防災組織の会長をしていた時に、身体障害者やお年寄りが、自分で動けない場合を想定して、非常時用避難器具を揃えて簡易担架やバール、消火器などセットで6箇所に設置し、毎年訓練時に器具点検をしている。